

第3章 IOC 評価委員会

第3章 IOC 評価委員会

第1節 IOC 評価委員会訪問の概要

IOC 評価委員会（本章では以下「評価委員会」という。）は、IOC 委員等により構成され、立候補ファイルの内容等を実地調査するために各立候補都市を訪問する。IOC 委員の立候補都市への個別訪問が禁止されているため、評価委員会訪問は大会開催計画や国を挙げての招致気運等をアピールする貴重な機会である。

評価委員会は、訪問調査の結果を分析の上、「評価委員会報告書」として取りまとめ、全 IOC 委員に配布する。立候補ファイルに対する IOC の評価を発表する唯一の報告書であることから、IOC 委員の投票行動に大きな影響を与えとも言われており、評価委員会訪問への対応は招致活動において、大変重要なものである。

4 日間の公式日程の中では、立候補都市による大会開催計画に関するプレゼンテーションやその内容に対する質疑応答、会場視察、レセプション等が実施された。

今回の評価委員会は、平成 25（2013）年 1 月に提出した立候補ファイルの内容を検証するため、同年 3 月に立候補都市を訪問した。また、評価委員会報告書は同年 6 月 25 日に公表された。

なお、評価委員会訪問期間中、IOC 視察団は、東宮御所に皇太子殿下を表敬訪問し、スポーツを通じた国際親善の絆を深めた。

1 立候補都市訪問日程

評価委員会は、平成 25 年（2013）3 月に 3 つの立候補都市を訪問した。

- 東京 : 3月 4日から 7日まで
- マドリード : 3月 18日から 21日まで
- イスタンブール : 3月 24日から 27日まで

2 評価委員会メンバー

評価委員は、IOC 会長によって、IOC 委員、IF 代表、NOC 代表、アスリート委員会代表、IPC 代表、専門家等の中から任命される。立候補都市の国籍を有する者は委員になる資格がない。

第2節 IOC 評価委員会訪問準備

平成 24（2012）年 9 月 5 日付けで、IOC から訪問日程に関する文書が発信され、訪問の公式日程が平成 25（2013）年 3 月 4 日から 7 日までであることが通知された。また、翌 6 日付けの IOC プレスリリースにより、専門家を除く評価委員 9 名が発表された。

続いて 10 月 18 日付けで IOC から、全委員（13 名）の氏名を含む評価委員会訪問のガイドラインが示され、滞在期間中の詳細なプログラム、公式歓迎夕食会に関する情報、滞在候補となるホテルリスト等について、指定の期日内に IOC に資料を提出することが求められた。これを受け、立候補ファイル作成作業と並行して評価委員会訪問対応に係る準備作業を行った。

なお、委員会の滞在日程については、11 月 30 日付け文書により、3 月 1 日から 8 日までとなる旨 IOC から通知があった。

1 滞在ホテルの選定

(1) 選定方法

評価委員会が滞在するホテルについては、立候補都市が 2 つか 3 つの候補ホテルを IOC に提示し、IOC がこれをもとに選択する。

IOC は、①ホテル内ですべての会議を行うことができること、②視察する会場への移動が容易であること、を考慮して候補を挙げるようガイドラインに記載している。

この条件に加え、過去の立候補都市の事例を踏まえて、候補ホテルの選定にあたっては以下の点を判断材料とした。

- 設営等の準備期間を考慮し、連続して 8 日間以上の日程を確保できること。
- プレゼンテーション会場、評価委員会用の執務室、東京側の事務局部屋の 3 つの部屋を最低限確保できること。
- 視察する会場へのアクセスが良いこと。

(2) ホテルの決定

IOC からの指定条件を満たす都内ホテルの多くが既に予約で埋まっていたことから、ホテルの確保は難航したが、ホテル側との調整の結果、IOC に対し 2 つのホテルを候補として提示した。

IOC による選考の結果、評価委員会滞在ホテルは「パレスホテル東京」に決定した。

2 評価委員会訪問プログラム作成

(1) 作成方法

評価委員会訪問プログラムについては、12月3日までに、立候補都市がIOCに詳細案を提出し、IOCが承認することとなっていた。

訪問プログラムは以下を含むものである。

- 訪問期間中の日程表
- 会場視察ルート

(2) 会場視察ルートの検討

IOCはガイドラインにおいて、会場視察に関して以下の指示をしている。

- すべての競技／非競技会場への視察を計画すること。委員会ではできる限り1グループで視察することを希望し、複数のグループに分かれて視察する必要がある場合には、各グループの構成はIOCが決定する。
- コスト意識を持って計画を立てること。
- 視察に関わる人数は最小限に留めること。
- 移動車両はバス（必要があればミニバス）であること。ヘリコプターの使用は禁止。

すべての会場を効率的に視察し、コンパクトな会場配置計画をアピールすることを念頭に、以下の点を確定させ、IOCに提出した。

- 視察経路
- 各会場での視察時間
- オプションルートの設定

評価委員会訪問プログラム提出後は、各会場でのプレゼンテーション・各デモンストレーション及びイベント・バス運行ルート設定等について、詳細な検討を行った。検討にあたっては、海外アドバイザー等より情報収集し、計画に反映させた。

第3節 リハーサル

評価委員会は、要人を含む多数の国内関係者が参加し、分刻みで過密なスケジュールにより実施される。

運営にあたっては、周到な計画作成・準備に加えて、突発的な予定変更等に適切に対応することが求められる。

このため、評価委員会訪問に先立ち、実際の公式訪問と同様のスケジュールで、4日間にわたり、プレゼンテーションと会場視察のリハーサルを実施した。

リハーサルでは、海外アドバイザーにより構成される模擬評価委員会からチェックを受け、その結果を参考に本番に向けた準備を整えた。

1 日程

平成25（2013）年2月13日から16日まで

	月日	曜日	スケジュール
第1日目	2月13日	水	プレゼンテーション/ 競技会場視察
第2日目	2月14日	木	プレゼンテーション/ 競技会場視察
第3日目	2月15日	金	プレゼンテーション/ 競技会場視察
第4日目	2月16日	土	プレゼンテーション

※評価委員会訪問時と同一曜日に実施することが理想であったが、プレゼンテーション会場の空き状況により、別の曜日での実施となった。

※原則として評価委員会訪問時のスケジュールに準じて実施したが、会場使用時間の制約等により、休憩・昼食等の時間は一部短縮した。

2 会場

プレゼンテーション：文化学園大学

競技会場視察：各競技会場

3 模擬評価委員会

過去の評価委員会訪問などにおける経験を有する海外アドバイザー6名により「模擬評価委員会」を構成し、本番を意識したプレゼンテーション及び会場視察を行った。

4 プレゼンテーション及び質疑応答

原則として、本番のスケジュールに沿ってプレゼンテーション及び質疑応答を実施した。

可能な限りプレゼンター本人が参加するとともに、評価委員会訪問時と同規模の会場において、モニター等同等の機器を設置する等、評価委員会訪問時の環境を可能な限り再現した。

プレゼンテーション及び質疑応答のリハーサルにおいて、確認した事項は主として以下のとおりである。

- ・ プレゼンテーション全体の進行把握
- ・ プレゼンターに対する表現力指導や言い回しの修正
- ・ 質疑応答における対応

5 会場視察

主として、車内や各会場での説明・質疑応答及び進行確認を行った。

また、今回のリハーサルが実際の評価委員会対応時と異なる曜日での実施となったことから、本番に近い条件での運行状況を確認するため、別途試走を行い、所要時間を確認した。

第4節 接遇関係

1 滞在ホテルでの接遇

評価委員会からのあらゆる要求・指示に適時適切に対応し、快適に過ごすことができるよう、滞在ホテルでは以下のとおり準備・対応した。なお、準備計画策定にあたっては、前回招致の実績と海外アドバイザーより聴取した過去の立候補都市の対応状況を参考とした。

- 各評価委員の宿泊部屋に、文房具・各種情報案内等の「ウェルカムキット」を用意した。
 - アクレディテーションカード（ADカード）の発行及び警備員の配置により、プレゼンテーション会場及び各執務室周辺の警備を行った。
 - IOCの窓口となる担当者を配置し、ホテルスタッフと協力して各会場への誘導や要望に対応できる体制をとった。
- また、歓迎ムードの創出や日本文化の表現のため、滞在ホテル内にIOC旗の掲揚・和装飾の設置、ホテル総支配人やスタッフによる出迎え・見送り等を行った。

2 食事及びインフォーマル・レセプション

(1) 食事

IOCの提示したガイドラインでは、評価委員会が執務室内で執務を行いながら食事できるように、指定された朝食及び昼食、夕食をbuffet方式で提供することが求められている。

日本らしさをアピールしながらバランスの取れた食事を提供するため、過去の立候補都市の事例収集やフードコーディネーターの活用等により、訪問期間中の食事を総合的に検討し、メニューを作成した。

(2) インフォーマル・レセプション

IOCから提示されたガイドラインでは、公式日程開始の前日である3月3日の夕方にインフォーマルなレセプションを設けることができるとされた。これは、評価委員会と立候補都市の主要メンバーの初顔合わせという重要な機会である。

一方、翌日から公式日程が開始すること、夕食前のわずかな時間で実施することを考慮し、ホテル内で小規模に実施することとした。会場選択や飲食物の用意にあたっては、フードコーディネーターや海外アドバイザーから意見聴取のうえ、準備を行った。

当日は招致委員会幹部だけでなく、国・スポーツ界等からの代表者、アスリート等が参加し、オールジャパン体制で評価委

員会を出迎えた。

3 空港での出迎え・見送り

IOC から平成 25（2013）年 2 月 8 日に評価委員のフライトスケジュールの通知があり、評価委員は同年 3 月 1 日から 2 日にかけて個別に入国し、同年 3 月 8 日に個別に出国することになった。

評価委員の空港到着時は、招致委員会理事長や幹部、評価委員と面識のある JOC や NF 関係者等が出迎えた。また、各評価委員に案内役を配置し、航空機を降りてからホテル到着まで一貫したアテンド体制をとった。誘導の際には入国手続きや荷物のピックアップ、車両乗車等を円滑にできるよう、関係省庁や空港職員の協力を得て、受入態勢を整えた。

空港からホテルまでの送迎については、連絡系の職員が同乗し、ホテルの事務局と連携して逐次交通状況をやりとりすることで、車両の現在地やルート情報を把握した。

なお、出国時も入国時と同様の対応を行った。

第5節 総理大臣の出席など国との調整・連携

1 調整事項

評価委員会訪問の際の政府との調整については、プレゼンテーションへの出席のほか、評価委員の出入国の際の手続の円滑化など、調整項目は多岐に渡り、ほぼすべての省庁との調整が必要となる。

各省庁との調整事項は以下のとおりである。

評価委員会訪問に伴う政府との調整事項

省庁名	調整事項
内閣官房 (官邸)	・総理大臣の公式歓迎行事への出席 ・官房長官へのプレゼンター（テーマ6）の依頼 ・内閣危機管理監へのプレゼンター（テーマ11）の依頼 ・総理大臣主催公式歓迎夕食会の開催
内閣府	・内閣府特命担当大臣の公式夕食会への出席 ・公式歓迎夕食会の迎賓館赤坂離宮の使用
総務省	・プレゼンテーション（テーマ8）への同席
法務省	・プレゼンテーション（テーマ4）への同席 ・評価委員の出入国の際の手続の円滑化
外務省	・外務大臣の公式歓迎夕食会への出席 ・プレゼンテーション（テーマ4）への同席 ・評価委員の出入国の際の手続の円滑化
財務省	・財務大臣の公式歓迎行事及び夕食会への出席 ・評価委員の出入国の際の手続の円滑化
文部科学省	・文部科学大臣の公式歓迎行事及び夕食会への出席 ・文部科学大臣へのプレゼンター（テーマ3、4）の依頼 ・プレゼンテーション（テーマ1・2、6、11）への同席 ・文部科学副大臣のインフォーマルレセプションへの出席
経済産業省	・プレゼンテーション（テーマ4）への同席 ・プレゼンテーション（テーマ4）への同席（特許庁） ・プレゼンテーション（テーマ8）への同席（資源エネルギー庁）
厚生労働省	・評価委員の出入国の際の手続の円滑化
農林水産省	・評価委員の出入国の際の手続の円滑化
国土交通省	・プレゼンテーション（テーマ5）への同席 ・プレゼンテーション（テーマ11）への同席（海上保安庁） ・プレゼンテーション（テーマ13）への同席

	・評価委員の出入国の際の手續の円滑化 ・フラッグ等掲出の依頼（国道、成田空港）
環 境 省	・プレゼンテーション（テーマ5）への同席 ・プレゼンテーション（テーマ5）への同席（原子力規制庁） ・フラッグ等掲出の依頼（北の丸公園、皇居外苑） ・競技会場視察への対応
防 衛 省	・プレゼンテーション（テーマ11）への同席 ・競技会場視察への対応
（全省庁共通）	・プレゼンテーション内容の調整 ・質疑応答対応に伴う連絡体制の確保（連絡待機）

2 調整方法

平成25（2013）年1月のIOCへの立候補ファイル提出後、IOC評価委員会対応へ向けた各省庁との個別調整を開始した。また、平成25（2013）年2月20日に開催された「第32回オリンピック競技大会・第16回パラリンピック競技大会東京招致に関する関係省庁等打ち合わせ会（第3回）」において、全省庁に対し、評価委員会訪問の概要説明を行い、関係省庁に対して協力要請を行った。

IOC評価委員会が訪問するまでの調整期間は2ヶ月程度であったが、同年3月1日には、「第32回オリンピック競技大会及び第16回パラリンピック競技大会の東京招致に関する閣僚会議」が発足され、同月6・7日には衆・参両院において2度目の国会決議が実現するなど、国の強力な支援体制が整ったこともあり、安倍首相を始めとする閣僚のプレゼンテーション等への出席や、迎賓館赤坂離宮における総理大臣主催公式歓迎夕食会の開催など、すべての調整事項について各省庁からの協力を得て、万全の体制で政府の評価委員会への対応が実現した。

この結果、評価委員会訪問期間中は、評価委員の入国から出国に至るまでの随所にわたり、評価委員会に対し、国を挙げて招致に取り組む姿勢を示すことができた。

また、プレゼンターの依頼を行った閣僚等のプレゼンテーションの内容については、原稿（英語）を作成し、入念な事前調整を行った。

第6節 プレゼンテーション

1 概要

評価委員会の公式訪問期間中、各日の前半（ランチタイムまで）は、立候補ファイル全14テーマについて説明及び質疑応答を順次行った。

プレゼンテーションでは、立候補ファイルの内容がIOCの技術的要求項目・水準を確実に満たしていることを分かりやすく説明することが求められており、立候補ファイルの記述内容の単なる繰り返しは避けるよう、IOCのガイドラインに明示されている。したがって、説明が平板にならないよう、とくにIOCが関心を持ち、重要と考えている論点について、的確かつ簡潔に説明するよう配慮して準備を進めた。

また、計画のポイントを示すスライドに加え、地図上にテーマに関連する施設（競技会場、ホテル、交番等）の立地等を示すマップ映像システムを補助的に利用することにより、コンパクトさを視覚的に分かりやすくアピールすることとした。

評価委員会は、その都市がIOCと仕事をするにあたり信頼できるパートナーであるかを確認する面もある。このため、コミュニケーションや親しみやすい雰囲気作りに気を配ると共に、IOCとの良好な関係作りに努め、主な招致メンバーはすべてのプレゼンテーションの期間中同席した。

なお、スケジュールどおりに会議を進めることもオリンピック・パラリンピック競技大会を管理運営する能力評価につながることから、プレゼンテーションの発言内容はすべて事前に原稿を作成し、リハーサル等を経て、適切な長さになるように調整を行った。

当日は、演台に設置したプロンプター（原稿表示装置）を活用してプレゼンテーションを行った。



プレゼンテーション

(1) プレゼンテーションの流れ

プレゼンテーションは、各テーマともスライド・映像を使用し、テーマによっては補助資料を使用した。説明は原則として英語で行った。

説明後、評価委員会から質問を聴取し、順に回答した。質疑応答については必要に応じて同時通訳（日英、日仏、英仏3チーム体制）を用いた。

各テーマのプレゼンテーション、質疑応答の時間配分はきめ細かくスケジュール設定されており、会議全体を仕切るのは評価委員長であるが、質疑の割り振りは東京側にまかされ、竹田招致委員会理事長と小谷実可子氏が受け持つこととした。

質疑応答時は、会場内の東京側出席者の前に設置されたモニター上に、オペレーションルームで用意した質問内容、回答者案、回答案を映し出し、回答者割り振り及び回答内容の参考とした。

改めて回答することが適当な質問については、翌日の朝までに回答することとした。

(2) プレゼンターの選定

IOC はガイドラインにおいて、招致に関わるすべての関係者の参加を求めている。一方、テーマごとに IOC の興味関心事が異なることから、各テーマの彼らが重視する論点に従い適切なプレゼンターを選定することとした。

例えば、競技計画部分についてはアスリート本位の考えを伝えるためオリンピック・パラリンピアン等を、財政など政府の保証の確実性を確認したいテーマについては閣僚等を、セキュリティのように実施責任体制の確実性・円滑性を確認したいテーマについては当事者である内閣危機管理監や警視總監を、詳細な運営計画については計画策定者である東京都の職員を選定した。このように各テーマについて責任を有する関係者から直接説明をする機会を設けることで、計画内容の確実性を証明することとした（具体的なプレゼンターについては、各テーマの説明において詳述）。

なお、英語でのプレゼンテーションを効果的に行うため、多くのプレゼンターに対し、個別のトレーニングの機会を設けた。

(3) プレゼンテーション会場

IOC はガイドラインにおいて、評価委員会と立候補都市はテーブルを挟んで向かい合って着席し、後方に IOC 事務局用に机を用意するよう指示している。このほか、過去の立候補都市の事例、海外アドバイザーからの意見及び運営上の効率性等を考慮し、機能的な会場を設営した（次頁写真・平面図のとおり）。

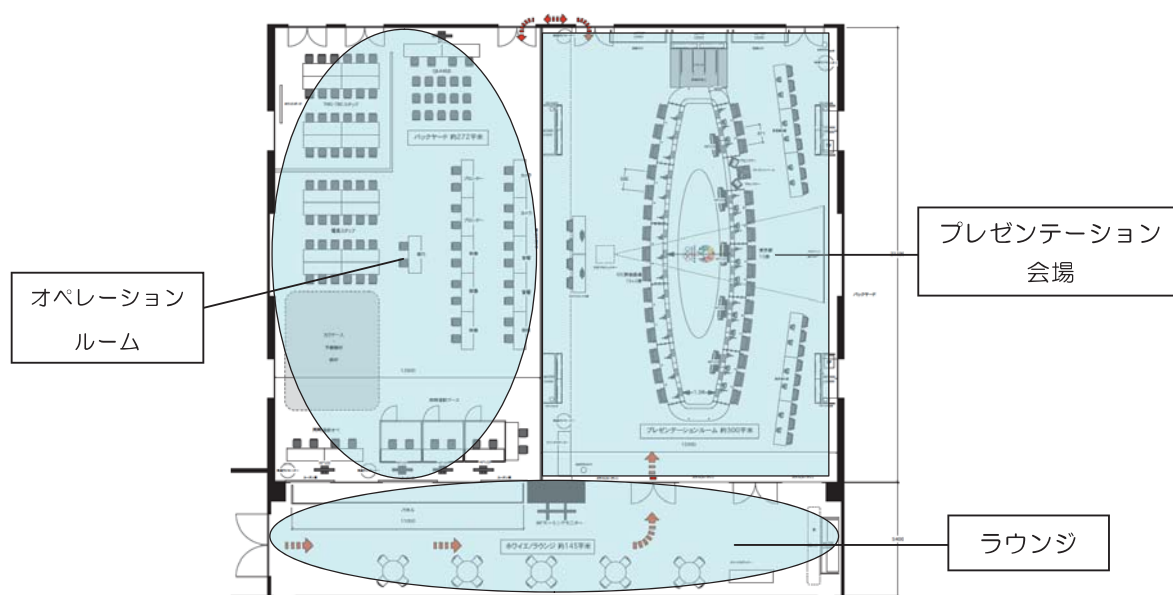
主な使用機器は以下のとおりである。

- ・ 壁面ディスプレイ（スライド・映像放映）
- ・ マップ映像システム（プレゼンテーション補助用）
- ・ モニターシステム・マイクシステム（各座席に設置）
- ・ プロンプターシステム（演台に設置）
- ・ 同時通訳システム

また、プレゼンテーション会場の他、プレゼンターの控え室及びリハーサル用の部屋を用意した。



プレゼンテーション会場(パレスホテル東京 山吹)



プレゼンテーション会場平面図

(4) 公式歓迎行事

立候補ファイル各テーマのプレゼンテーションに先立ち、公式訪問第1日目の3月4日冒頭において、安倍首相を始め関係閣僚、JPC会長を始めとしたスポーツ界幹部、経済界、オリンピック、パラリンピアンが出席し、評価委員会に対し歓迎の挨拶を行った。

これは、IOCの提示したガイドラインにおいて、プレゼンテーションの冒頭に行うことを認められている公式の行事である。

安倍首相、猪瀬都知事、竹田招致委員会理事長が登壇、歓迎挨拶を行い、国を挙げての歓迎姿勢を表した。

なお、安倍首相の挨拶では、歓迎の言葉を述べるにとどまらず、1964年東京オリンピックの際の歌「海をこえて友よきたれ」（土井一郎作詞、飯田三郎作曲）の一節を歌い、2020年オリンピック・パラリンピック競技大会の東京招致に懸ける熱意をアピールした。



安倍総理大臣



猪瀬知事による挨拶

2 各テーマにおけるプレゼンテーションの内容

(1) テーマ1 & 2 ビジョン、レガシー及びコミュニケーション、大会の全体的なコンセプト

○ 日 程

3月4日 午前8時20分から午前9時20分まで

○ プレゼンター及びプレゼンテーション内容

敬称略・役職当時

プレゼンター	プレゼンテーション内容
竹田 恒和 (招致委員会理事長)	○ ビジョン「Discover Tomorrow」 ○ 世界で最も先進的な都市で開催するダイナミックな祭典 ○ 3つの基礎 確実な大会運営、セレブレーション、イノベーション ○ 日本のオリンピックの歴史 ○ オリンピックムーブメントへの貢献
水野 正人 (招致委員会専務理事)	○ 大会コンセプト ○ 会場の概要 ○ レガシー
猪瀬 直樹 (東京都知事)	○ 東京の全面的な協力と関与 ○ 東京の強さ(財政、インフラ、大会運営能力) ○ 大会ビジョン・計画と東京都の長期計画(2020年の東京)との合致
澤 穂希 (オリンピック)	○ アスリートに最高の舞台を提供する東京大会

○ 同席者

敬称略

氏名・役職等
鈴木 大地（オリンピック 招致委員会理事）
国枝 慎吾（パラリンピアン）
久保 公人（文部科学省スポーツ・青少年局長）

(2) テーマ3 政治・経済の状況及び構造

○ 日 程

3月5日 午前11時30分から午後12時30分まで

○ プレゼンター及びプレゼンテーション内容

敬称略

プレゼンター	プレゼンテーション内容
下村 博文 （文部科学大臣）	○ 政府の全面的な支援 オリンピックスタジアムの建設をはじめ、政府によるあらゆる支援の提供を約束 ○ スポーツ基本法 現在のスポーツや社会の動向を反映し、旧法を包括的に改定
橋本 聖子 （議員連盟会長代行）	○ 国会の全面的な支援 主要政党が党派を超えて招致を支持
猪瀬 直樹 （東京都知事）	○ オリンピック・パラリンピック開催に向けた東京の決意 スポーツの発展は東京都の政策において中心的な目標であり、その達成のためにオリンピック・パラリンピック開催は必要不可欠
新波 剛史 （経済同友会副代表幹事）	○ 大会成功のための経済界の支援 経済界を代表し、2020年東京大会の成功を確実なものとするためのあらゆる支援を約束
岡村 正 （日本商工会議所会頭）	○ オール・ジャパンでの招致気運の盛り上げ 日本商工会議所加盟組織に所属する数百万の従業員の力を活かした活動により、1月の調査では73%の支持率

○ 同席者

敬称略

氏名・役職等
福井 照（文部科学副大臣）

(3) テーマ4 法的側面

○ 日 程

3月5日 午後12時30分から午後13時30分まで

○ プレゼンター及びプレゼンテーション内容

敬称略

プレゼンター	プレゼンテーション内容
竹田 恆和 (招致委員会理事長)	○ 大会組織委員会の組織体制 IOCと緊密に連携し、大会準備・運営に万全な態勢を確立
下村 博文 (文部科学大臣)	○ オリンピック開催に十分な法整備・体制 スポーツ基本法の制定及びこれに基づいたスポーツ基本計画
辻井 幸一 (リーガルアドバイザー)	○ オリンピック・マークの確実な保護 世界最高の知的財産保護制度と、税関や警察等による厳しい対策

○ 同席者

敬称略

氏名・役職等
細倉 浩司 (JOC マーケティング部長)
佐竹 勝一 (弁護士・弁理士)
石岡 邦章 (法務省入国管理局入国在留課長)
中田 昌宏 (外務省国際文化交流審議官組織人物交流室長)
早川 治 (外務省領事局外国人課長)
大橋 建男 (外務省領事局外国人課 課長補佐)
福井 照 (文部科学副大臣)
久保 公人 (文部科学省スポーツ・青少年局長)
氷見谷直紀 (文部科学省スポーツ・青少年局競技スポーツ課国際スポーツ室長)
松岡 徹 (経済産業省経済産業政策局知的財産政策室課長補佐)
岩崎 安子 (特許庁商標課課長補佐)

(4) テーマ5 環境

○ 日 程

3月7日 午前10時00分から午前11時00分まで

○ プレゼンター及びプレゼンテーション内容

敬称略

プレゼンター	プレゼンテーション内容
水野 正人 (招致委員会専務理事)	○ 環境を重視した大会 2020年東京大会は、地球の未来のために今日の環境を大切にするという信念に基づいて開催
大野 輝之 (東京都環境局長)	○ 東京都と2020年東京大会の先進的な環境政策
末吉竹二郎 (国際連合環境計画金融イニシアチブ特別顧問)	○ 環境ステークホルダーとの協力、コミュニケーションと良好な関係構築 ○ 環境面からのレガシー

○ 同席者

敬称略

氏名・役職等
小笠原 靖 (環境省大臣官房総務課課長補佐)
橋本 周 (原子力規制委員会原子力規制庁監視情報課課長補佐)
近藤 修 (国土交通省総合政策局交流連携事業調整官)
秋元 利明 (国土交通省鉄道局技術企画課課長補佐)
潮崎 俊也 (国土交通省鉄道局施設課長)
杉野 浩茂 (国土交通省航空局航空ネットワーク部空港施設課大都市圏空港調査室長)
大川 正芳 (成田国際空港株式会社運用計画部技術安全計画グループ部付)
酒井 一夫 (独立行政法人放射線医学総合研究所放射線防護研究センター長)

(5) テーマ6 財政

○ 日 程

3月5日 午前9時00分から午前10時00分まで

○ プレゼンター及びプレゼンテーション内容

敬称略

プレゼンター	プレゼンテーション内容
菅 義偉 (内閣官房長官)	○ 日本国政府による財政保証
猪瀬 直樹 (東京都知事)	○ 東京都の強固な財政力 ○ 4000 億円の東京オリンピック・パラリンピック 開催準備基金
延與 桂 (東京都スポーツ振興局部長)	○ 堅実な財政計画 ○ 確実に実現性が高い OCOG 予算収支

○ 同席者

敬称略

氏名・役職等
平岡 英介 (JOC 常務理事)
細倉 浩司 (JOC マーケティング部長)
加藤 勝信 (内閣官房副長官)
久保 公人 (文部科学省スポーツ・青少年局長)
氷見谷直紀 (文部科学省スポーツ・青少年局競技スポーツ課国際スポーツ室長)

(6) テーマ7 マーケティング

○ 日 程

3月5日 午前10時00分から午前11時00分まで

○ プレゼンター及びプレゼンテーション内容

敬称略

プレゼンター	プレゼンテーション内容
張 富士夫 (トヨタ自動車株式会社代 表取締役会長)	○ 国内スポンサーシップの可能性 日本企業の多くは、ビジネス上の理由のみならず社 会的責任感からもスポーツを支援
竹田 恒和 (招致委員会理事長)	○ 2020 年東京大会のマーケティングの確実性
遠山 友寛 (弁護士)	○ 権利保護、アンブッシュマーケティングの徹底
矢内 廣 (びあ株式会社代表取締役社長)	○ 会場を満員にするチケット戦略

○ 同席者

敬称略

氏名・役職等
平岡 英介（JOC 常務理事）
細倉 浩司（JOC マーケティング部長）
川口三三夫（日本体育協会事務局長）
廣邊 裕二（社団法人東京屋外広告協会副会長）

(7) テーマ8 競技及び会場

○ 日 程

3月4日 午前9時20分から午前10時20分まで

○ プレゼンター及びプレゼンテーション内容

敬称略

プレゼンター	プレゼンテーション内容
荒木田裕子 （招致委員会スポーツディレクター）	○ 選手村を中心としたコンパクトな会場配置 ○ アスリート本位の計画 ○ 各競技会場と街が一体となった祝祭の雰囲気
細井 優 （東京都スポーツ振興局長）	○ 実現性の高い後利用計画 11 の新規に建設する競技会場は、大会後も長くスポーツ・レクリエーション・文化活動等に寄与する施設となること ○ 東京の行政計画と合致した会場計画 特に臨海地区においてスポーツ環境が整備されること
河野 一郎 （独立行政法人日本スポーツ振興センター理事長）	○ オリンピックスタジアム 環境に配慮しつつ、世界最先端の技術を駆使して建築される優れたデザインのスタジアムは、2020年以降のレガシーともなる象徴的な建物であること

○ 同席者

敬称略

氏名・役職等
鈴木 大地（オリンピック 招致委員会理事）
澤 穂希（オリンピック）

土田和歌子（パラリンピアン）
劉 伸行（東京電力株式会社企画部課長）
北瀬 裕明（東京電力株式会社総務部グループマネージャー）
高濱 航（エネルギー資源庁総合政策課戦略企画室室長補佐）
曳野 清（エネルギー資源庁電力・ガス事業部政策課課長補佐）
星野 理彰（東日本電信電話株式会社ネットワーク事業推進本部設備部設備計画部門長）
前原 昭宏（株式会社NTT ドコモネットワーク部技術企画部門担当部長）
浅井 淳夫（総務省総合通信基盤局電波部電波政策課周波数調整官）
戸部絢一郎（総務省総合通信基盤局電波部電波政策課係長）

(8) テーマ9 パラリンピック競技大会

○ 日 程

3月4日 午前11時35分から午後12時35分まで

○ プレゼンター及びプレゼンテーション内容

敬称略

プレゼンター	プレゼンテーション内容
島原 光憲 (JPC 委員長)	○ 日本における障害者スポーツの振興
澤崎 道男 (東京都スポーツ振興局課長)	○ オリンピックから連続した一つの祭典としてパラリンピックを開催 ○ 世界最高水準のアクセシビリティ
佐藤 真海 (パラリンピアン)	○ アスリートにベストな環境を提供するコンパクトな会場計画 ○ あらゆる人にとって快適な、ユニバーサルデザイン化された施設
国枝 慎吾 (パラリンピアン)	○ コンパクトな計画によって作り出されるダイナミックな雰囲気 ○ 日本におけるパラリンピックへの関心の高さ

○ 同席者

敬称略

氏名・役職等
大日方邦子（パラリンピアン）
田口 亜希（パラリンピアン）
土田和歌子（パラリンピアン）

- ・1964 年の東京パラリンピック以来の日本の障害者スポーツの発展を紹介する映像を作成し、冒頭に上映

(9) テーマ10 選手村

○ 日 程

3月4日 午前10時35分から午前11時35分まで

○ プレゼンター及びプレゼンテーション内容

敬称略

プレゼンター	プレゼンテーション内容
太田 雄貴 （オリンピック）	○ 三方を海が囲む素晴らしいロケーション ○ アスリートの意見を取り入れ、様々な工夫が織り込まれた計画
福田 至 （東京都スポーツ振興局部長）	○ 28の競技会場が8km圏内の立地 ○ 前回招致時の提案を大きく上回る陸地44haの広さ
田口 亜希 （パラリンピアン）	○ 混雑時でも待ち時間が60秒以上になることのない高速エレベーター ○ 障害を持つ人々のニーズにも配慮した設計 オリンピックからパラリンピックへの移行のための作業はほぼ必要ない。
秋山 俊行 （東京都副知事）	○ 選手村開発の確実性 東京都の都市開発計画と合致した開発である。 民間開発事業者が東京都の厳格な監督の下整備を行う。

○ 同席者

敬称略

氏名・役職等
神本 雄也（アスリート）
高梨 沙羅（アスリート）

(10) テーマ11 大会の安全、セキュリティ及び医療サービス

○ 日 程

3月7日 午前9時00分から午前10時00分まで

○ プレゼンター及びプレゼンテーション内容

敬称略

プレゼンター	プレゼンテーション内容
米村 敏朗 (内閣危機管理監)	大会のセキュリティ体制と大会の安全確保のための政府の全面的な支援を説明
西村 泰彦 (警視総監)	豊富な警備経験と世界最大規模の警備資源を擁する警視庁が万全の態勢で大会の安全を確保することを説明
千代延晃平 (警視庁警備第一課長)	警視庁を中心とするセキュリティ戦略を説明
竹田 恆和 (招致委員会理事長)	東京の医療資源、大会時の医療体制等について説明
浅川 伸 (日本アンチ・ドーピング機構(JADA)CEO)	国内におけるアンチ・ドーピング活動、大会時の検査体制等についてアンチ・ドーピング活動の専門家として説明

○ 同席者

敬称略

氏名・役職等
北村 吉男(東京消防庁消防総監)
松本 裕之(警察庁警備局警備課長)
久保 公人(文部科学省スポーツ・青少年局長)
氷見谷直紀(文部科学省スポーツ・青少年局競技スポーツ課国際スポーツ室長)
岩並 秀一(海上保安庁警備救難部警備課長)
土本 英樹(防衛省運用企画局事態対処課長)
野中 博(社団法人東京都医師会会長)
高橋 秀直(社団法人東京都歯科医師会会理事)
山本 信夫(社団法人東京都薬剤師会会長)

氏名・役職等	
嶋森	好子（社団法人東京都看護協会会長）
福井	次矢（聖路加国際病院院長）
後藤	明（日本赤十字社東京都支部事務局長）

○ プレゼンテーションのポイント

	プレゼンテーションのポイント
1	大会のセキュリティ体制と全面的な政府支援 政府として、「東京オリンピック競技大会準備対策協議会」を設置し、政府を頂点としたセキュリティ体制を構築するとともに、すべての関係機関を挙げて、大会の安全確保に必要なセキュリティサービスを提供することを、内閣危機管理監自らがアピール
2	警視庁の警備方針 世界に誇る良好な治安を基盤とし、豊富な警備経験を有し、世界最大規模の46,000人の人員を誇る警視庁が21,000人の部隊を投入し、万全の体制で警備に当たることを、警視総監自らがアピール
3	警備戦略について 警視庁にセキュリティ・コマンドセンターを設置し、警視庁を中心にすべての機関が一体となってオリンピックセキュリティ活動を行うこと
4	充実した医療資源 東京の病院や医師及び看護師数、救急医療体制について説明
5	豊富なアンチ・ドーピング資源 アジア地域を代表する常任理事国としてWADAに対して積極的な貢献を行っていること、JADAを中心に国内における一元的なドーピング防止活動の推進体制が整っていることをアピール さらに大会時における万全なドーピング・コントロール体制をアピールするため、大会に必要な要件を十分に満たすドーピング・コントロール・プログラムの策定、WADA 認定分析機関の移転拡充計画について説明

(11) テーマ12 宿泊施設

○ 日 程

3月6日 午前9時00分から午前10時00分まで

○ プレゼンター及びプレゼンテーション内容

敬称略

プレゼンター	プレゼンテーション内容
松山 良一 (JNTO 理事長)	○ 日本、東京の観光資源 ○ 日本人のおもてなしについて
延與 桂 (東京都スポーツ振興局部長)	○ 大会関係者のニーズ、利便性を考慮した最適な 配宿計画 ○ 保証書で担保された客室確保及び宿泊料金のコ ントロール
大橋 寛治 (日本ホテル協会会長)	○ 豊富かつ多様な宿泊施設インフラ オリンピック大会のあらゆる訪問者のニーズを 満たすのに十分な客室数と多様な宿泊施設がある こと

○ 同席者

敬称略

氏名・役職等
上條 清文 (公益財団法人東京観光財団理事長)

(12) テーマ13 輸送

○ 日 程

3月6日 午前10時00分から午前11時00分まで

○ プレゼンター及びプレゼンテーション内容

敬称略

プレゼンター	プレゼンテーション内容
岸井 隆幸 (日本大学理工学部教授)	○ 東京の輸送インフラと輸送システム
福田 至 (東京都スポーツ振興局部長)	○ 大会関係者のための輸送システム
岡本 安志 (警視庁交通部交通管制課長)	○ 円滑な大会輸送運営

○ 同席者

敬称略

氏名・役職等
二井田春喜 (社団法人東京バス協会専常務理事)

氏名・役職等
渡利 千春（東日本旅客鉄道株式会社総務部次長）
小林 圭次（社団法人日本民営鉄道協会運輸調整部長）
佐々木 健（首都高速道路株式会社計画・環境部担当部長）
近藤 修（国土交通省総合政策局交流連携事業調整官）
小川 博之（国土交通省総合政策局企画専門官）

(13) テーマ14 メディア

○ 日 程

3月6日 午前11時30分から午後12時30分まで

○ プレゼンター及びプレゼンテーション内容

敬称略

プレゼンター	プレゼンテーション内容
山本 浩 （法政大学教授）	○ 信頼性が高く優れたメディア環境の提供
久保田啓一 （NHK 技師長）	○ 技術、メディアの進化について
鈴木 徳昭 （招致委員会部長）	○ IBC/MPC の利便性について

○ 同席者

敬称略

氏名・役職等
和田 一郎（有限会社メディア・サポート代表取締役）

3 質疑応答への対応

(1) 想定問答

質疑応答は、プレゼンテーションと同様に重要なものであり、その内容は、「IOC 評価委員会報告書」に多大な影響を与えるものである。

そのため事前準備として、想定問答集の作成、IOC からの質問に対する回答者の割り振り、プレゼンテーション当日の運営体制の構築を行った。

想定問答の作成は、立候補ファイル作成の作業が終了した直後から開

始し、テーマごとに過去の立候補都市の資料を参考にしながら質問を列挙していった。

さらに、テーマごとに計画作成担当者が海外アドバイザーとミーティングを行い、追加質問や回答内容について協議を行った。また、質疑内容によっては、回答内容について関係各所に照会して調整を進めるとともに、関係機関等には、プレゼンテーション当日の連絡待機を依頼した。

(2) 当日の対応

質疑応答は各テーマとも、立候補都市側のプレゼンテーションの後に行われる。一問一答形式ではなく、質問をすべて受け付けた後に、都市側司会者が回答を割り振り、順次回答する形式をとる。

当日の質疑応答への対応は、オペレーションルームにて、東京都担当者と海外アドバイザーが質問内容を確認し、回答案と回答者案を作成した。会場内の東京側出席者の前に設置されたモニターには、オペレーションルームを介して質問内容、回答案、回答者案が映し出され、回答者割り振りの参考とした。

IOCからの質問が多い場合や、発言が長く意図がわかりにくい場合において、本オペレーションは非常に効果的であった。

質問は技術的な観点から多数かつ多岐に渡ったが、登壇者の他、会場内に同席した東京都計画担当者が事前の入念な準備に基づき的確に回答し、IOCには好印象を与えることができた。

また、各日の会場視察終了後には、招致委員会理事長を始めとする幹部によるミーティングを開き、追加説明が必要な場合等、改めて回答する場合の対処方針を定めた。その方針に基づき、各テーマ担当が海外アドバイザーとともに回答文を作成した。これらは、原則、翌日の朝までに回答することとし、夜を徹して回答作成の作業が行われた。

時間の制約が厳しい中、政府を始め関係者への事実確認等についても迅速に行うことで、回答や追加資料を適切に提出した。



オペレーションルーム

第7節 会場視察（視察ルート、各会場でのプレゼンテーションなど）

評価委員会公式訪問4日間のうち、初日から3日目までのそれぞれ午後が会場視察に割り当てられている。この視察の目的は、立候補ファイルに記載されている競技開催計画の実現可能性を検証することである。IOCは、各施設がオリンピック・パラリンピックの競技会場として技術的な要件を満たしているか、用地及び財政面が担保されているか、レガシープランがあるか等に関心を持っている。したがって視察時に、これらの点について、評価委員会に対し明確に説明し、理解を得ることが求められる。

視察当日までの主なスケジュールを示すと以下のとおりである。

年月日	内容
平成24年10月18日	IOCより各立候補都市に対し評価委員会訪問ガイドライン提示 このガイドラインにおいて、訪問プログラムの詳細案を提示するよう指示あり
12月7日	IOCに訪問プログラムの詳細案を提出。会場視察については、3つのオプションルートを含むタイムスケジュール、視察予定会場、視察順序、各会場の滞在時間及び会場の状態（既存・新設等）を提示 加えて、複数の3つ星ホテルを訪問するホテルオプションを提示
平成25年1月15、16日 1月31、2月1日	人及びバスの動線を確認する試走を実施
2月13～15日	本番を想定した全体リハーサルを実施
3月4～6日	評価委員会に対する会場視察を実施

1 準備及び実施概要

東京側にとって、視察の目的は、東京の競技会場がオリンピック・パラリンピック競技大会の会場としての諸条件を満たし十分に開催能力があるということ及び「コンパクトな会場配置」というコンセプトを評価委員会に対し的確に説明し、理解を得ることである。

そのため、過去のオリンピック・パラリンピック競技大会の招致や運営に携わった海外アドバイザーの助言や関係機関の協力を得て準備、実施した。

(1) 視察スケジュールの作成

IOCのガイドラインでは、原則としてすべての競技会場予定地を視察しなければならないとされる。また、視察時の移動車両はバスであることとされ、ヘリコプターの使用は禁止される。

また、IOC から原則として全員が1グループで視察することが求められることから、すべての会場を効率的に視察しコンパクトさをアピールする必要がある。そのため、3日間の会場配分、オプションルートの設定、発着時間（全体時間）等、スケジュールを的確に作成しなければならない。

ア 3日間の会場配分について

東京の会場配置コンセプトを解り易く説明できるよう、視察は立候補ファイルに記述したゾーンを基本とし行うこととした。また、「アスリートファースト」の視点を視察においても一貫させるため、視察初日に会場配置の中心である選手村から訪れることとした。初日に選手村と東京ベイゾーン、2日目はオリンピックスタジアムを皮切りにヘリテッジゾーン、最終3日目は東京ベイゾーンの両端に位置する2会場とIBC/MPC を視察するコースを設定した。

イ オプションルートについて

選手村を中心とした半径8km 圏外も含めて全ての会場を1グループで視察することは困難であるため、オプションルートも設定した。対象は武蔵野の森クラスター、陸上自衛隊朝霞訓練場、霞ヶ関カンツリー倶楽部の3箇所とし、メインの視察ルートからのアクセスを考慮して初日に陸上自衛隊朝霞訓練場、2日目に霞ヶ関カンツリー倶楽部、最終3日目に武蔵野の森クラスターを視察することをIOC に提案した。

このルートの検討に際しては、選手村、オリンピックスタジアム、IBC/MPC の主要三施設は全員で視察することとし、初日は選手村の後、2日目はオリンピックスタジアムの後、オプションルートに分岐し、最終3日目は視察の最終地点であるIBC/MPC でメイン、オプションの両ルートが合流するコースを設定した。

オプションルートについては、評価委員会来日後の平成 25（2013）年3月3日（日）に陸上自衛隊朝霞訓練場と霞ヶ関カンツリー倶楽部を2日目（3月5日）にまとめて視察したい旨、評価委員会から提案があった。両会場と日程及び時間の変更について調整の上、変更提案どおり実施した。

ウ 発着時間について

午前中のプレゼンテーション及び質疑応答と、視察終了後の公式歓迎夕食会など、他の行事との関係を調整し、一日ごとに発着時間を設定した。

3月4日（月）午後3時から午後7時まで

3月5日（火）午後2時30分から午後6時30分まで

3月6日（水）午後1時45分から午後5時まで

エ ホテルオプションについて

会場視察に関するIOCとの事前協議の中で、3つ星ホテルを視察するオプションルートを設定するよう要望があったため、最終3日目に武蔵野の森クラスターに加え2つの3つ星ホテルを視察した後、視察の最終地点であるIBC/MPCで合流するオプションルートを設定した。

2つのホテルの協力を得て万全の受け入れ態勢を整えていたが、評価委員会来日後の3月3日（日）に、評価委員会からホテルの視察は行わない旨連絡があり、ホテルオプションは実施に至らなかった。

(2) 運行ルートの選定

各会場の滞在時間をより長く確保するため、バスの運行にあたっては、最も効率的かつ輸送時間を最短とするルートを選択する必要がある。また、当日事故等が起きた場合の代替ルートについてもあわせて検討する必要がある。

視察ルートの決定については、複数回の試走の実施に基づき当日の道路交通状況を想定し、最短ルート及び複数の代替ルートを選定した。

当日は、関係機関の協力のもと精度の高い道路交通情報を取得し、バスに対し最適な運行ルートの指示を出すことで、計画どおりに運行した。

(3) 各会場でのプレゼンテーション

限られた時間内で、会場計画の優位性を説明するため、プレゼンターの選定及びプレゼンテーション内容について十分検討を行う必要があった。

会場説明内容については、技術的な面を中心に原稿を作成した。プレゼンター及び同席者については、アスリート、NF、JOC、地元や会場の関係者の協力を得るとともに、招致委員会・東京都から会場についての適任者も同席した。

プレゼンテーション補助資料としては、各会場においてはパネル・模型、バス車内においてはスライド・映像を使用した。また、IOCからの指示に基づき、各会場の基本情報を掲載した資料を作成し、配付した。

(4) 各会場でのデモンストレーション、イベント

会場視察においては、会場計画説明を行う以外にも、歓迎ムードを表現し、スポーツが盛んであることをアピールすることも重要である

ことから、各種デモンストレーション、イベントを実施した。

NF、企業、大学・近隣の小中学校、幼稚園の協力のもと、視察先で歓迎イベントが実施され、招致気運の盛り上がりを経験委員会にアピールした。

なお、初日の視察の最終地点である有明テニスの森では、猪瀬都知事が車いすテニスの国枝慎吾選手とのラリーを披露するサプライズ演出もあり、好評を博した。

2 結果

出発・到着時間、各会場での視察時間のいずれも当初計画どおりに進行するなど、万全の運営を行うことができた。

各会場においては、評価委員と面識のあるNF役員やアスリート、地元関係者、多数のボランティア等が出迎え、歓迎の意を表するとともに東京支持を強く訴えた。

評価委員会からは技術的な質問を中心に多くの質問がなされたが、作成した想定問答等を踏まえ、的確に回答することができた。

第8節 公式歓迎夕食会

立候補都市は、評価委員会訪問期間中、公式歓迎夕食会を1回開催することができる。評価委員会訪問はプレゼンテーション・会場視察が大半を占め、過密なスケジュールとなる。したがって、公式歓迎夕食会は、評価委員が日本の文化に触れ、懇親と交流を深め、東京・日本の魅力や歓迎の意を感じる貴重な機会である。

評価委員会公式訪問第3日目(3月6日)夜、迎賓館赤坂離宮において、安倍総理大臣主催による公式歓迎夕食会が開催された。

東京側は、安倍総理大臣を始め、憲仁親王妃久子殿下にも御臨席いただき、政財界・スポーツ界等各界の代表者39名により、オールジャパン体制で評価委員会を歓迎した。

迎賓館赤坂離宮の利用については、原則、国・公賓級の接遇のみに限定されているが、2016年招致の際に政府に対して強い働きかけを行った結果、総理大臣主催という形で公式歓迎夕食会を迎賓館で開催した。今回の評価委員会訪問においても、政府と調整を行い、日本を代表する施設である迎賓館赤坂離宮において、安倍総理大臣主催による公式歓迎夕食会の開催を行った。

迎賓館赤坂離宮でIOC評価委員会に対する歓迎夕食会を開催することで、国賓級の待遇を示すことができた。また、夕食会の進行の中では、迎賓館赤坂離宮が1964年の東京オリンピック時に大会組織委員会事務局が設置された場所であることなども紹介した。

総理大臣主催の夕食会ということから、飲食の提供・官邸楽団による生演奏等については、政府の外交儀礼として実施した。全体のプログラム・演出等については、極めて限られた期間の中で、政府との調整を図りつつ、東京側で念入りな企画準備を行い、事前にリハーサルを実施する等、細部に至るまで注意を払った。特に、演出面では、前回公式歓迎夕食会に比較してエンターテインメント性を高めた演出を増やしたことにより、IOC評価委員から好評を得ることができた。



第9節 シティ装飾事業

平成 25（2013）年1月末より、都民、国民の招致気運を高めるとともに、2月下旬の東京マラソン 2013、評価委員会視察の機会をとらえ、招致実現に向けた東京の熱意を国内外にアピールするため、都内各所に招致 PR 用の街路灯フラッグ、バナー、モニュメント等を掲出する「シティドレッシング」を展開した。

1 シティドレッシング実施スケジュール

- 第一フェーズ：調査・デザイン選定 平成 24（2012）年 11 月～12 月

装飾物の製作・設置にあたり、効果的かつ安全な装飾箇所を把握するために事前調査を行った。都内約 7,000 箇所の街路灯、会場予定地内の約 1,400 箇所、その他、ゲートウェイ施設である成田空港、羽田空港、東京シティターミナルの調査を行った。

同時に、装飾物のデザイン検討及び掲出する各施設の管理者、道路管理者等との調整にも入った。

- 第二フェーズ：製作・設置 平成 25（2013）年 1 月～2 月

第一フェーズを経て、検討した結果、約 3,500 箇所に装飾物の製作及び設置を行った。装飾物を設置にあたっては、施設管理者、道路管理者への占用申請、警察への道路使用申請を行った。

- 第三フェーズ：メンテナンス・撤去 平成 25（2013）年 3 月～9 月
- 設置した装飾物の設置状況を定期的に点検し、脱落や破損・汚損等の有無を確認し、破損等が発生した際の対応を行った。掲出可能期間に合わせて、設置した装飾物を順次、撤去した。



有明テニスの森の立体サイン



日本武道館のルックバナー

2 効果的な事業実施に向けて

海外向けのスローガンである「Discover Tomorrow」を認知してもらうために、国内向けの装飾物と異なるデザインとした。立候補ファイルのグラフィックデザインで記載された画も参考にしながら、開催計画をイメージしてもらうよう、デザインを決定した。

また、限られた予算の中で、最大限の装飾効果を行う為に、評価委員会の

到着・出発や視察ルートを中心に、重点的に行うべき装飾箇所の選定を行った。しかし、ゲートウェイ（空港等の玄関口）装飾は、IOC 評価委員がどの空港を使うかというフライト情報が第二フェーズの半ばまで得られず、装飾箇所の選定に苦慮した。



“Discover Tomorrow”のフラッグ



成田空港のデジタルサイネージ

3 結果

国内メディアが東京マラソン直後や評価委員会視察中に、シティドレッシングの様子を撮影し、各種の報道で露出できた。また、来日したIOC 評価委員会ルート及び出入国した空港の動線の大部分を装飾したことにより、海外メディアや評価委員にも東京都における国内招致気運の高まりを印象づけることができた。

【装飾場所リスト】

- ・会場予定地等 21 箇所（立体サイン、ルックバナー、アスリートバナー、外灯フラッグ、床面装飾、懸垂幕等）
- ・道路等 街路灯フラッグ約 3,100 枚
- ・空港等 羽田空港、成田空港、東京シティエアターミナル（フラッグ、ルックバナー、懸垂幕、デジタルサイネージ等）



国立霞ヶ丘競技場の懸垂幕



選手村予定地での床面装飾

第10節 メディア対応

多くの国内外メディアが注目するこの機会に、好意的な報道の最大化を図るとともに、海外に東京の存在感を示し、優れたメディアオペレーションをIOC委員に対しアピールするため、円滑なメディア対応を心がけた。

その結果、評価委員会訪問期間中、招致に関する多数の露出が得られ、東京の活動や開催計画等に関する認知度が高まった。

1 具体的な取組

評価委員会訪問期間中の国内外メディアの活動拠点及び情報発信拠点として、ホテルオークラ内にメディアセンター※を設置し、連日以下の情報を提供した。

- ・午前／午後各1回、実施されたプレゼンテーションの概要について、プレゼンターを招いたプレスブリーフィングを実施
- ・1日の動き全般について招致委員会／東京都幹部による記者会見を実施
- ・各日の会場視察の中から代表的な場所を選んで取材機会をセッティング
- ・各日の評価委員会活動全般の画像、映像を撮影し編集素材のメディア配信サービスを実施
- ・各種情報を取材メディアに常時配信

事前に合計3回の取材説明会を実施し、事前の周知がおこなわれたことから混乱なくスムーズな取材活動が行われた。最終的な取材登録メディアは、国内813名、海外133名、合計946名にのぼり、期間中のテレビ露出の広告換算額は約163億円であった。

なお、プレゼンテーションや会場視察等の公式訪問プログラムにおける取材機会の提供にあたっては、IOCと綿密な協議のうえ実施した。

月 日	活 動	会 場	内 容
1月24日	メディア向け説明会①	都庁	・取材方針、記者AD登録、日程等について
2月25日	メディア向け説明会②	都庁	・スケジュール、映像・画像等提供サービス、取材要綱について
3月1日	評価委員会来日	成田空港、パレスホテル	・評価委員会委員長らの到着時取材機会提供

※メディアセンター：センターの設備としては、記者会見場（同時通訳付き）、記者用ワーキングルーム（プリンター、コピー機、有線／無線インターネット等を設置）、広報スタッフルームを用意した。

(敬称略)

月 日	活 動	会 場	内 容
3月3日	メディア向け説明会③	ホテルオークラ	・取材スケジュール、取材場所、事前注意事項等
	インフォーマルレセプション	パレスホテル	・冒頭風景を公式班※が撮影
	メディアカクテルパーティ	ホテルオークラ	・記者との懇親会 ・都知事、竹田招致委員会理事長、水野専務理事らが出席
3月4日	プレゼンテーション会場公開	パレスホテル	・冒頭、会場内風景の取材機会提供（以降、5日、6日、7日も実施）
	東京主催記者ブリーフィング	ホテルオークラ	・プレゼンテーションの内容を説明（テーマ1,2） ・登壇者：澤穂希
	サイトビジットメディア会場視察	晴海トリトン 有明テニスの森	・晴海トリトンから東京ベイゾーンについての説明 ・有明テニスの森での知事と国枝選手野のテニス実演の取材 ・各会場での囲み取材
	東京主催記者ブリーフィング	ホテルオークラ	・プレゼンテーションの内容を説明（テーマ9） ・登壇者：鳥原 JPC 会長、国枝慎吾、佐藤真海
	東京主催記者会見	ホテルオークラ	・当日の総括 ・登壇者：猪瀬都知事、竹田招致委員会理事長、高梨沙羅、神本雄也
3月5日	プレゼンテーション会場公開	パレスホテル	・冒頭、会場内風景の取材機会提供
	東京主催記者ブリーフィング	ホテルオークラ	・プレゼンテーションの内容を説明（テーマ6） ・登壇者：張トヨタ会長

※公式班：メディアによる取材が困難な場合、公式班がメディアに替わって写真及び映像の撮影を行い、素材をメディアへ提供した。

(敬称略)

月 日	活 動	会 場	内 容
	会場視察におけるメディア会場視察	東京体育館 東京国際フォーラム	・東京体育館での福原選手による卓球実演の取材 ・東京国際フォーラムでのジュニアウェイトリフティングの実演や、
			- 三宅選手のプレゼンテーションの取材 ・各会場での囲み取材
	東京主催記者ブリーフィング	ホテルオークラ	・プレゼンテーションの内容を説明(テーマ3) ・登壇者：橋本参議院議員
	東京主催記者会見	ホテルオークラ	・当日の総括 ・登壇者：竹田招致委員会理事長、水野専務理事
3月6日	プレゼンテーション会場公開	パレスホテル	・冒頭、会場内風景の取材機会提供
	東京主催記者ブリーフィング	ホテルオークラ	・プレゼンテーションの内容を説明(テーマ13) ・登壇者：岸井日本大学教授
	サイトビジットメディア会場視察	東京ビッグサイト	・評価委員と都知事、オリンピック等の記念撮影 ・会場での知事の囲み取材
	東京主催記者ブリーフィング	ホテルオークラ	・プレゼンテーションの内容を説明(テーマ14) ・登壇者：山本法政大学教授
	東京主催記者会見	ホテルオークラ	・当日の総括 ・登壇者：鈴木招致委員会戦略広報部長
	公式夕食会	迎賓館	・代表取材による、入場風景の撮影 ・公式班による、冒頭部分の撮影
3月7日	プレゼンテーション会場公開	パレスホテル	・冒頭、会場内風景の取材機会提供

(敬称略)

月 日	活 動	会 場	内 容
	東京主催記者ブリーフィング	ホテルオークラ	・プレゼンテーションの内容を説明 (テーマ5、11) ・登壇者：大野東京都環境局長、浅川 JADA 専務理事
	ドーピング検査車両展	ホテルオークラ	・ドーピング検査車両の展示
	評価委員会主催記者会見	パレスホテル	・登壇者：クレイグ・リーディ委員長、ジルバール・フェリ エグゼクティブディレクター
	東京主催記者会見	パレスホテル	・全日程を通しての感想等 ・登壇者：猪瀬都知事、竹田招致委員会理事長、水野専務理事、下村文部科学大臣、荒木田スポーツディレクター、鳥原 JPC 委員長、太田雄貴、田口亜希
3月8日	評価委員会離日	パレスホテル	・評価委員会委員長の出発風景を公式班が撮影

2 記者会見

IOC からのガイドラインに従い各プレゼンテーションは非公開としたため、各日記者会見において、当日のプレゼンテーション内容につきメディアに対する説明を行った。

また、最終日には、評価委員会による会見が行われた後、東京側も全日程を振り返り、記者会見を行った。

(1) 評価委員会記者会見

クレグ・リーディ評価委員会委員長

「招致委員会のプロフェッショナルな準備と協力に熱意を感じた。政府と経済界の強い支援も知ることができた。」

「今回の視察で、皇室の方とお会いできたことは、国民的な支援があることの象徴だと思う。」

「プレゼンの質が高かったということで印象付けられた。一括して、素晴らしかった。」



評価委員会記者会見

(2) 東京側記者会見

猪瀬都知事

「国民が、都民が皆、この 2020 年オリンピック・パラリンピックに大きな期待を抱いて未来を掴もうとしているという、まさに、「Discover Tomorrow」の姿を、今回の評価委員会の人達にお見せすることができた、と確信している。」

竹田招致委員会理事長

「数多くの日本のオリンピックやパラリンピアンが今回、関与し、彼らの熱意と、献身、コミットメントというのは、誰の目にも明らかであった。また、それらが、IOC に対する我々のプレゼンテーションを更に明るく灯してくれ、全体として、我々の「Discover Tomorrow」のビジョンをきちんと示すことができた」

3 メディアセンターの概要

設置期間 3月1日（金）～3月7日（木）

設置場所 ホテルオークラ東京

(1) プレスワーキングルーム

3月1日（金） 12：00～23：00

3月2日～7日（木） 7：00～23：00

(2) ADセンター

3月1日（金） 12：00～20：00

3月2日～6日（水） 8：00～20：00

3月7日（木） 8：00～18：00 ※AD登録は17：00まで

設備：プレスワーキングルーム（プリンター、コピー機、日英ノートPC、有線/無線インターネット等）、インフォメーションカウンター、ADセンター、記者会見場

席数：合計 168 席（ADカード保有者のみ利用可）

第11節 評価委員会報告書

1 評価委員会報告書の内容

平成25（2013）年6月25日18時に、IOCのウェブサイト上で、2020年オリンピック・パラリンピック競技大会の各立候補都市に対する評価委員会報告書が公表された。

(1) 評価委員会報告書の位置付け

評価委員会は、各立候補都市が提出した立候補ファイルの内容を検証するため、それぞれの立候補都市を訪問し、大会計画の優れた点や課題とすべき点について、評価委員会報告書として報告する。

評価委員会報告書は、評価委員全員が合意した意見であり、全IOC委員に送付されると同時に公表され、IOC総会においてIOC委員が開催都市を選定する際の参考にされる。

なお、この評価委員会報告書は、立候補都市間の優劣をつける目的のものではないため、立候補都市選定時とは異なり、数値による評点をつけていない。

(2) 東京の評価

ア 高く評価された点

事 項	評 価 内 容
ビジョン、レガシー、コンセプト	○ 大会ビジョンは、都心でユニークな祝祭を創り出し、オリンピックの価値を強化し次世代にスポーツの素晴らしさを伝えるものである。 ○ レガシープランはよく考慮されており、物理的、社会的、環境における取組みを伴っている。
競技及び会場	○ 選手村から8km圏内に競技会場の85%、練習会場の70%を配置しコンパクトな計画である。 ○ 電力は、現状でも、大会を開催するのに十分であり、2020年までに継続的に改善される見込み。
選手村	○ 都心に近接した魅力的なウォーターフロントの敷地（44ha）に選手村を計画し、選手に素晴らしい経験を提供する。
パラリンピック	○ 東京の交通機関のアクセシビリティは非常に高い水準にあり、大会開催までに更に強化される。

宿泊	○ 既存の部屋数の多さは利点であり、新規建設のリスクがなく、配宿計画をきわめて円滑にする。
輸送	○ 強固な既存の輸送ネットワーク、コンパクトなコンセプトによって合理的な移動時間が確保できる。
環境	○ コンパクトな会場配置や、近代的な公共交通網の利用により、大会による環境への影響を最小化。
セキュリティ	○ 立候補ファイルは、大会の安全・安心を確保するため、非常によく検討された計画になっている。
政治及び市民の支援	○ 全てのレベルの政府による強力なサポートがあり、主要政党や経済界からも支援を受けている。
マーケティング	○ 東京の市場規模や日本の経済、日本におけるスポーツへの情熱に鑑みると、チケット収入・国内スポンサー収入の目標は十分に達成可能なものである。
財政	○ 大会開催準備基金が既にあり、これは大会関係施設整備費を完全に賄えるものである。

イ その他言及された点

- ・ 会場が集中するお台場地区及び海の森地区へのアクセスへの配慮が必要。
- ・ 柔道、卓球、ボクシングに使用される既存会場は周辺のスペースが限られており、運営に対する検討が必要であると思われる。
- ・ 車椅子利用時のエレベーターのキャパシティについては、きめ細かい検討が必要になる。
- ・ 射撃とゴルフ会場への移動時間がそれぞれ 40 分、55 分がきにかかる。
- ・ カヌー（スラローム）会場（葛西臨海公園）がバードサンクチュアリに近接していること、東京がそのことを認識しており、関係者と協議を行っていることなどについて。
- ・ 日本は地震国であるが、建物の耐震化が進められている。
- ・ 専門家による津波のシミュレーションでは、東京湾の地形により津波の影響は著しく軽減される。食品中の放射性物質については、健康関係機関の調査結果によると国際的な基準の範囲内である。

(3) 2016年招致時との差異

2016年招致時の評価委員会報告書では、その最終部分に、各都市の計画に対する評価の要約があったが、2020年評価委員会報告書では言及されていない。

また、発表時期もIOC総会(10月上旬)直前だった2016年に対し、テクニカルブリーフィング(7月上旬)の直前と前倒しになった。

2 コメント、記者会見

(1) コメント

記者会見に先立ち、竹田招致委員会理事長、猪瀬都知事のコメントを発表した。(日・英・仏語)

ア 竹田招致委員会理事長

東京を非常に高く評価いただいた報告書の内容を、大変嬉しく思っています。3月の評価委員会訪問時は、IOC関係者の皆さまと非常に中身の濃い1週間を過ごすことができましたが、その成果が表れたと思います。この報告書を作成いただいた、IOC評価委員会の皆さまに感謝申し上げます。

世界のスポーツ界がチャレンジングで急速な変化に直面している時代に、確実性をもたらす東京の計画の卓越さが、この報告書によって裏付けられたことを誇りに思います。大会開催までの7年間、またその先に続く強いIOCとのパートナーになるべく、私たちは素晴らしいオリンピック・パラリンピック大会の開催実現のために一層の努力を果たしていくつもりです。

報告書の中では、Discover Tomorrow-未来(あした)をつかもう-というスローガンの下、革新と伝統的な価値を融合して、安全で確実な大会を開催しようとする東京の大会ビジョン、8km圏に85%の競技会場と70%のトレーニング施設を配する非常にコンパクトな大会計画、日本の近年の国際大会開催経験、4000億円の開催準備基金を含む強固な財政や、盤石のインフラに支えられた輸送計画、非常に多い宿泊施設の数、政府・経済界を含む全国的な大会開催支持などについても、非常に高い評価を得ることができました。

この卓越した大会計画を柱に、世界中の若者たちにオリンピックの価値を伝えていくことに貢献できることを、固く確信しています。今後も引き続きIOC、国際競技団体、各国国内オリンピック委員会、選手、スポンサー、メディア、そして世界中のスポーツファンが、2020年に東京で最高の大会を経験できることを、積極的にアピールしていきます。

イ 猪瀬都知事

本日、IOC 評価委員会は、2020 年オリンピック・パラリンピック競技大会の立候補都市に関する評価報告書を発表しました。

評価委員会から非常に高く評価されたことを、大変うれしく感じております。今年 3 月の IOC 評価委員会では、毎日 2,600 万人を迅速かつ確実に輸送する東京の緻密な鉄道網、すでに銀行に預金されている 45 億ドルの大会開催準備基金、安全・安心な都市であることなどを、プレゼンテーションを通じて、説明いたしました。また、競技会場や選手村、メディアセンターなどの現地視察を時間通りに実施することで、コンパクトな会場配置や確実な運営体制を実感して頂きました。さらに、おもてなしの心をはじめとし、東京という都市の魅力も十分に伝えることができたと考えています。

その結果、東京が、コンパクトな会場配置、迅速かつ信頼性の高い輸送システム、質・量ともに充実した宿泊施設、大会開催準備基金に象徴される磐石な財政基盤、セキュリティ体制のよさなど、大会開催能力の高さについて、詳細にわたり極めて高い評価を頂きました。

開催都市が決定される 9 月の IOC 総会まで、世界中に大きな夢と希望をもたらすオリンピック・パラリンピックの日本招致を確実に勝ち取るため、日本国政府、他の地方自治体、経済界、スポーツ界などオールジャパンの体制で、引き続き全力で招致活動に取り組んでまいります。

(2) 記者会見（日・英語）※同時通訳

招致委員会は、「評価委員会報告書」の発表を受けて、記者会見を実施した。

評価委員会報告書の内容に対する東京としての姿勢を明らかにするとともに、残り約 2 ヶ月となった招致活動において、最終的な勝利を目指す意気込みを示した。

○ 日時 平成 25(2013)年 6 月 25 日 21 時 30 分から 22 時 00 分まで

○ 会場 都庁第一本庁舎 7 階ホール

○ 登壇者 竹田招致委員会理事長、猪瀬都知事、水野招致委員会専務理事

○ 会見内容

ア 竹田招致委員会理事長

「東京は非常に高く評価をいただいたことを大変嬉しくおもっております。3 月の評価委員会の来日時におきましては、IOC の関係者の皆様方と非常に中身の濃い 1 週間を、過ごす事ができました。この評価委員会報告書にはその成果が表れたものだと思っております。

この評価委員会報告書を作成いただいた IOC の評価委員会の皆様方に心から感謝を申し上げたいと思います。現在、世界のスポーツ界は非常にチャレンジング

で、急速な変化、そういった場面に直面します。そういった不確かな時代において、確実な我々の計画の卓越感がこの評価委員会報告書によって裏付けられたものだ」と誇りに思っております。

いよいよ来週は大変重要なプレゼンテーションであるテクニカルブリーフィングが行われますが、この評価委員会報告書に内容は、それに向けて大きな弾みにしたいと我々もおもっております。今後も引き続きまして、IOC の関係者の皆様方、あるいは IF の方々、オリンピック委員会連合の皆様方、選手、スポンサー、メディアの方、そして世界中のスポーツファンの方々が、この 2020 年に、東京で最高の大会を経験できるということを、今後とも積極的に、アピールしていきたいと思っております。」と感想を述べた。

イ 猪瀬都知事

「全般的に非常に高い評価が与えられており、非常に嬉しく思っております。これまでの努力が着実に実ってきつつあるというふうに思っております。

評価委員会報告書では、随所に東京の万全な開催能力への言及があります。迅速かつ信頼性の高い輸送システム、質・量ともに充実した宿泊施設、大会開催準備基金に象徴される磐石な財政基盤、セキュリティ体制のよさなど、こういったことが、非常に高く評価されています。

オリンピック・パラリンピック大会は、アスリートにとって、4 年に 1 度の夢の舞台です。だからこそ、アスリートが最高のパフォーマンスを発揮でき、世界中から集まる観客も大会を心から楽しめる、最高の環境を用意すること、これが開催としに課せられた使命であり、ホスピタリティであります。

招致活動も、いよいよ終盤戦です。竹田理事長をはじめ、「チーム日本」が一つになって、9 月 7 日の最後の瞬間まで全力を尽くします。

まずは来週、東京が、大会の開催地に最もふさわしいと IOC に思って頂く、IOC にとって最高のパートナーであるということをしっかりと訴えてまいります。メディアの皆様、さらには、この記者会見をニュースなどでご覧になっている国民の皆様のご支援を、よろしくお願いいたします。」とコメントした。

ウ 水野招致委員会専務理事

「今回、IOC 評価委員会から、東京の開催計画や開催能力が高く評価されたことを大変嬉しく感じています。しかし、私達は、今後も IOC などの大会関係者と密接に連携を図りながら、さらに開催計画をブラッシュアップしてまいります。日本招致を実現するため、IOC 評価委員会から高く評価された開催計画や東京・日本の持つ高い開催能力、招致にかける熱い情熱などについて、今後も積極的にアピールしてまいりますので、ご理解、ご協力をお願いいたします。」と述べた。



(3) IOC へのコメント

竹田招致委員会理事長より、IOC に対して以下の返信をした。

東京 2020 招致チームを代表して、評価委員会の皆様が 2020 年オリンピック・パラリンピック立候補都市の評価報告書に関して、献身的でプロフェッショナルな仕事をしてくださったことに、お祝いとお礼を申し上げたいと存じます。

私たちは、東京 2020 招致への貴重なコメント及び評価に対し、非常に感謝しております。もちろん、いただいたコメントや評価を全面的に考慮していきます。

私たちは評価委員会報告書が東京招致の多くの良い点を認識してくださったと感じています。万全に準備された安全な大会、東京のコンパクトで都市の中心での祭典、東京の盤石な財政、東京の強力な既存輸送ネットワークと大会計画（短い移動時間）、そして宿泊施設とレガシー計画などを含めて。

私たちは 2020 年大会を開催する栄誉を勝ち取るため、より一層努力して参ります。そして、IOC、NOC、IF、スポンサー、メディアそして世界中のスポーツファン皆様のために、万全に準備された安全な大会を開催します。

最後になりますが、皆様の継続的なサポートと東京 2020 へのご協力に対して、改めて感謝を申し上げます。また、素晴らしい 2020 年大会を開催するために皆様と一緒に協力する機会があることを期待しています。

